

## 情報発信活動における仮想的な聴き手・読み手の特徴—情報発信内容との関連に着目して—

小野田 亮介 (山梨大学大学院 総合研究部 准教授)

## ■ 問題意識と本研究の目的

プレゼンテーションや作文など、あらゆる情報発信活動では、情報の受け手(聴き手, 読み手)に合わせて情報を調整することが不可欠である。そこで本研究では、中学校の国語科における情報発信活動を対象とし、(1) 仮想的な受け手の特徴と、(2) 受け手の想定の方が情報発信活動に与える影響を明らかにし、その結果をふまえ、(3) 受け手に合わせた調整を促す指導方法について提案することを目的とした。また、前年度の助成研究からの継続課題として、(4) 読み手意識が聴き手意識に影響を与えるかどうかについても検証することとした(図1)。

## ■ 研究 1-1・1-2 : 読み手の想定が文章産出に与える影響

〈研究 1-1〉文章産出時に想定される読み手の特徴を明らかにするため、中学校 2 年生の 1 学級 43 名を対象とし、「自分の中学校の良さを小学校 6 年生にプレゼンする」というテーマの作文課題を実施した。また、文章産出後に読み手意識の自己評定(読み手意識得点)と、「想定した読み手」の特徴についての記述を求めた。評定得点と文章内容の分析の結果、具体的な読み手を想定した生徒は全体の 2 割程度であり、読み手意識の自己評定と読み手の具体性、および文章内容の間にも有意な関連は認められなかった。

〈研究 1-2〉上述の結果は、読み手意識が不明瞭であることによって生起していると仮定し、読み手を可視化することで読み手意識を強調する指導を実行した。中学校 1 年生の 2 学級 79 名を対象とし、(1) 読み手を想定するように口頭で強調する「対照条件」と、(2) それに加えて、作文用紙に想定した読み手の特徴を記述させる「可視化条件」とで読み手意識得点と産出される文章を比較した。条件間比較の結果、対照条件に比べ、可視化条件において読み手意識得点の平均値が高く、さらに文章に含まれる学校の情報や、魅力を伝えるための工夫数が多いことが示された。一方、可視化条件では読み手に合わせた調整の結果、情報に偏りが生じる可能性も示された。

〈研究 2-1〉上述の結果は、読み手意識が不明瞭であることによって生起していると仮定し、読み手を可視化することで読み手意識を強調する指導を実行した。中学校 1 年生の 2 学級 79 名を対象とし、(1) 読み手を想定するように口頭で強調する「対照条件」と、(2) それに加えて、作文用紙に想定した読み手の特徴を記述させる「可視化条件」とで読み手意識得点と産出される文章を比較した。条件間比較の結果、対照条件に比べ、可視化条件において読み手意識得点の平均値が高く、さらに文章に含まれる学校の情報や、魅力を伝えるための工夫数が多いことが示された。一方、可視化条件では読み手に合わせた調整の結果、情報に偏りが生じる可能性も示された。

## ■ 研究 2-1・2-2 : プレゼンテーションにおける聴き手の想定が情報発信に与える影響

〈研究 2-1〉想定される聴き手の特徴とその影響を明らかにするため、中学校 1 年生の 2 学級 80 名を対象とし、本の魅力を他者に伝えるビブリオバトルを行った。個人内での情報発信プロセスを、(a) 情報を収集する「情報探索」、(b) 提示する情報を抽出する「情報提示」、(c) 発信内容を自分で調整する「個人練習」の 3 段階に分節化して捉え、各段階の聴き手意識と情報発信の関連について検証した。また、個人練習後にはペア練習を行い、聴き手からのフィードバックをふまえて発信する情報を修正する活動を行った。分析の結果、聴き手意識の自己評定は情報発信の内容や聴き手からの評価と関連しない一方で、ペア練習後の修正数(聴き手に合わせた調整数)は聴き手からの評価と正の関連にあることが示された。

〈研究 2-2〉そこで、聴き手に合わせた調整を促す指導方法について検討するため、中学校 1 年生の 3 学級 121 名を対象とし、(1) 研究 2-1 と同様にペアで相互フィードバックを行う「ペア条件」、(2) 4 名のグループで相互にフィードバックを行う「グループ条件」、(3) 4 名のグループで聴き手がそれぞれ特定の観点を担当し、その観点からフィードバックを行う「役割グループ条件」の 3 条件間で修正数の比較を行った。その結果、ペア条件、グループ条件、役割グループ条件の順で修正数が増加していたことが示された。この結果は、聴き手それぞれから多様なフィードバックを受けるよりも、特定の観点到焦点化したフィードバックを整理して与えられる方が聴き手に合わせた調整を効率的に促す可能性を示している。

## ■ 研究 3 : 読み手意識が聴き手意識に与える影響

読み手意識と聴き手意識の関連を検証するため、「本の魅力を紹介する」というテーマの作文課題を行った後、ビブリオバトルで同じ本について紹介する活動を行った。中学校 1 年生の 3 学級 119 名を対象とし、(1) 本を紹介する文章を書く「対照条件」、(2) 評論家として本を紹介する文章を書く「役割条件」、(3) 評論家としてのペンネームを書いた上で、本を紹介する文章を書く「役割強調条件」の 3 条件を設定した。条件間比較の結果、文章産出では評論家の役割を与えた 2 条件で情報数が増加していたが、プレゼンテーション段階では有意な差は認められず、文章産出で読み手を想定していても、プレゼンテーションでは聴き手を想定しないなど、読み手意識と聴き手意識の間に明確な関連は見出されなかった。以上の結果から、読み手意識と聴き手意識は共に受け手に対する意識でありながら、その機能と影響は異なる可能性が示された。

